『今昔物語集』の悪人往生説話

石橋義秀

小稿は、『今昔物語集』に見られる悪人往生説話について考察しようとするものであるが、一応、次の各節に分けて論を進める、なお〈註〉は各節の終りに記るす。

㈠極楽往生説話について〔三八～四〇頁〕
㈡悪人・悪人往生についての概観〔四〇～四二頁〕
㈢『今昔物語集』の悪人往生説話(1)(2)(3)〔四二～四八頁〕
㈣むすび〔四八～四九頁〕

(一)　極楽往生説話について

周知の如く、『今昔物語集』には、願生者が極楽浄土に往生するという話〈極楽往生説話〉が非常に多く見られる（即ち、往生説話を特集した巻十五巻の52話を中心に、各巻に合計109話[1]あり、大きな説話群をなしている）。その説話内容のあらましについては、既に論じたことがあるが[2]、小稿に関係する点だけを要約すると――(1)極楽浄土に往生するために、願生者（修行者）たちは日頃から善根功徳を積んでいた。(2)その往生の行業は人により種々様々であるが、それらの行業は、(イ)法華経読誦一行だけの場合[3]、(ロ)念仏一行だけの場合[4]、(ハ)諸善兼行の場合[5]とに大別できる。しかし、(イ)(ロ)(ハ)いずれの場合も自ら積んだ善根の力で極楽に往生できると信じられており、いわゆる自力修行の立場にある。(3)往生極楽のために悪・罪を恐れ、悪業を行わない[6]というのが一般的であった。つまり、大部分の修行者たちは、数多く善根を積めば、その功徳で往生は可能となるが、逆に罪を造れば（日頃つんだ善根が取り消され）往生は不可能となる、と信

じたようである。

要するに、『今昔物語集』の極楽往生説話の多くは、善人往生説話というべきであろうが、わずかながら悪人が極楽浄土に往生する話〈悪人往生説話〉があり、後にくわしく述べるが、特異な内容をもつ。悪人往生説話については、既に家永三郎氏が親鸞の悪人正機説に関連づけて論じておられるが、小論では、『今昔物語集』の説話を中心にし、『大日本国法華経験記』や、平安朝の諸往生伝の悪人往生説話を参照しつつ検討したい。

註

① 極楽往生説話と認められるものは次の109話である。巻四の(36)・(37)、巻六の(15)～(18)、(36)・(37)・(40)・(43)・(44)、巻七の(5)、巻十一の(4)、巻十二の(32)・(33)、(38)～(40)、巻十三の(5)・(8)・(9)・(13)・(14)・(16)・(19)・(24)・(25)・(27)・(32)・(35)・(41)～(43)、巻十四の(1)・(6)・(21)・(23)・(25)、巻十五の(1)～(44)、(47)～(54)、巻十六の(35)、巻十七の(2)・(10)・(14)・(16)・(17)・(22)・(23)、(29)～(31)、(39)、巻十九の(8)・(14)・(17)・(23)・(36)・(37)、巻二十の(23)

② 拙稿「『今昔物語集』に於ける往生思想――特に西方願生者の修行態度について――」（「松柏」多屋頼俊先生退職記念特集号、昭和48年3月）

③ 円久（巻十二の(38)）など十九例。註②拙稿25頁・(イ)参照。なお、この十九例は、いずれも『大日本国法華経験記』に依っている。

④ 無空（巻十四の(1)）など三十三例。註②拙稿26頁・(ソ)参照。なお、この三十三例の内、十八例は『日本往生極楽記』に依っている。その他の十五例は出典未詳で、『今昔物語集』独自の説話と考えられる（拙稿34頁の註(5)参照）。ちなみに、念仏の意味内容（観念・口称）については、拙稿29頁のほか、別稿「『日本往生極楽記』と『今昔物語集』巻十五―観念の念仏から口称の念仏へ―」（「大谷学報」第50巻第3号・昭和46年1月）に詳しく論及した。

⑤ 平願（巻十三の(19)）など三十七例。註②拙稿26頁・(ロ)～(レ)参照。

⑥ 往生のために罪を恐れ、悪業をやめるという事例は多いが、次に典型的な説話を示す。

(イ)近江守・伴彦真の妻は道心があり、阿弥陀仏を念じていたが、彦真に「我レ、年来、汝ト夫妻ノ契リ有リト云ヘドモ、同ジ床ニ不臥ズシテ、触バヒ近付ク事無シ。然レドモ、定メテ其ノ罪無キニ非ジ。然レバ、我レ、汝ト同所ニ不居ジ。…別ニ居テ、其ノ罪ヲ遁レム」と言った（巻十五の(48)）とあるが、夫婦でありながら、そのように厳しい態度を示すのは、往生の障害となる罪を遁れるためであった。その妻は、さらに「我レ、年来、弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、懃ニ極楽ニ往生セムト為ルニ、聊ノ滞リ有リ。此レヲ量ラフニ、先年ニ、（鮒二匹を）取テ井ノ中ニ入レテキ。而ルニ、彼ノ鮒、定メテ、狭キ所ニ久ク有テ、『広キ所ニ有ラム』と悲(シム)ラム。若シ、

其ノ罪ノ故ニ滞ルカ」と言って、鮒を放出させたところ、その妻は身に苦しむところなく往生したとある。この説話の末尾に、『今昔物語集』の編者は「此レヲ思フニ、然許ノ罪ニ依テ、往生ノ滞リト成ル。況ヤ、心ニ任セテ罪ヲ造レラム人ハ、往生、極メテ難有キ事……」と記している。

(ロ)済源僧都は「常ニ念仏ヲ唱ヘテ極楽ニ生レム事ヲ願ヒ」臨終に「念仏ヲ唱テ絶入ナムト為ルニ」地獄より火の車が来て、地獄の鬼は「先年ニ、此ノ寺ノ米五斗ヲ借テ仕タリキ。而ルニ、未ダ其ヲ不返納ズ。其ノ罪ニ依テ、此ノ迎ヲ得タル也」と言った、そこで済源僧都は米を一石にして返済すると「（地獄の）火ノ車ハ返テ、極楽ノ迎ヘ得タル」（巻十五の(4)）とある。それは僅かな罪であるが、往生の障害になっている。従って、往生するためには、罪を造ってはならないが、もし罪を造った場合は、生前に罪障をつきとめて、それを解消しておかなければならない。生前に罪過を消滅しておかなかった場合は、いくら善根を積んでいても往生はできない。例えば、無空律師は「偏ニ念仏ヲ唱フルヲ以テ業トシテ、『必ズ極楽ニ生レム』と思っていたが、「没後ノ料（葬式の費用）」にしようと銭を天井の上に隠しおき、弟子に知らせずに死んだため「其ノ罪ニ依テ、蛇ノ身ヲ受テ、銭ノ所ニ有テ苦ヲ受ル事量無シ。」（巻十四の(1)）とある。但し、無空律師は、枇杷大臨に法華経を書写供養してもらい、その功徳により、蛇道を免れ、年来の念仏の力によって極楽に往生することができたという。

なお、往生の障害になる罪については、拙稿「『今昔物語集』にみる罪障意識」（「文芸論叢」第2号・昭和49年3月）を参照いただきたい。

⑦「親鸞の宗教の成立に関する思想史的考察」（『中世仏教思想史研究』・昭和22年8月・法蔵館刊）。なお、悪人正機説の歴史的な研究として、田村円澄氏の論文「悪人正機説の成立」（「史学雑誌」61編11号・昭和27年4月）があり、悪人の意味について詳しく説かれている。

(二)　悪人・悪人往生についての概観

いうまでもないことであるが、悪人、あるいは、悪人往生を問題にする際、誰もが念頭に思い浮かべるのは、『歎異抄』の第三章の文（いわゆる悪人正機を説くところとしてよく知られている）である。

「善人なをもちて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいはく、悪人なを往生す。いかにいはんや善人をや、と。この条、一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善の人は、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。……他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり、よりて善

人だにこそ往生すれ、まして悪人は、と仰さふらひき。」（『歎異抄新註』51～52頁）

ただし、『歎異抄』に言う〈悪人〉とは、自力的な往生行――たとえば、造寺・造仏とか、写経・読経誦経など、往生のための善行――をなすことができず、宿世の罪業の深さを自覚・反省した者を指すのであり、『今昔物語集』や、平安朝の往生伝類に記された悪人の意味とは大いに異なる。（後に詳述するが、平安朝の往生説話においては、悪人とは、文字通り殺生などの罪を犯した者を指す場合が多いが、例外もある。）

ところで、『今昔物語集』の往生説話に非常な影響を及ぼした我国の最初の往生伝『日本往生極楽記』（慶滋保胤撰、永観元年～寛和元年・983～985成立）[1]の序文に、

「また瑞応伝[2]に載するところの四十余人、この中に牛を屠り鶏を販ぐ者[3]あり。善知識に逢ひて十念に往生せり。予この輩を見るごとに、いよいよその志を固くせり。……」（日本思想大系本の訓読文による。同書11頁）

と、中国の事例（分州人・張鍾馗、註③参照）をあげて、悪人往生を問題にしている。ここに言う悪人とは、仏教でいましめる殺生の罪を犯した者を指しているが、そのような悪人でも極楽に往生できるということに対し、撰者保胤は志を強くしている。但し、『日本往生極楽記』の往生説話（四十二編）には、悪人往生の事例は見られない。[4]悪人往生説話が見えるのは、法華経の霊験功徳譚129話を集録した『大日本国法華経験記』（鎮源撰、長久年間1040～1044頃成立、[5]『日本往生極楽記』成立後、五十余年）が最初で、四例（註④の(イ)参照）を数えるが、それらは、いずれも『今昔物語集』巻十五に取り入れられている。

註

① 『日本往生極楽記』の成立については、一応、日本思想大系(7)の解説（712頁）に依った。ちなみに、『続本朝往生伝』序に「寛和の年の中に、著作郎慶保胤が、往生の記を作りて世に伝へたり。」（同右・大系(7)・223頁の訓読文による）と記されている。

② 『瑞応伝』は、中唐の僧、文諗・少康の共撰といわれ、中国における最初の独立した往生伝である。但し、現存本は『瑞応刪伝』（つぶさには『往生西方浄土瑞応刪伝』）となっており、五代呉越国僧道詵の撰といわれる。保胤は原本『瑞応伝』を参照したのかどうかについては、大いに問題になるところである。原本と現存本との関係について、小笠原宣秀氏は『瑞応刪伝』は唐代の文諗少康共輯の原本の呼称であり、『瑞応刪伝』は五代道詵によって刪削増減された本の呼称である。而して我国へは後者が伝写将来されたことは確実であり、現存する丈けの資料によっては之を『瑞応刪伝』と呼ぶと共に古名に復して『瑞応伝』と呼んだと思われる。而して前者が

果して後者とは別に我国へ伝来したか如何かということは判然としないのである。」（『中国近世浄土教史の研究』339頁・昭和38年4月、百華苑刊）と述べておられる。因みに、『瑞応刪伝』には四十八の往生人伝を収録する。（『日本往生極楽記』序文には「四十余人」と記す。）

③　『瑞応刪伝』三十九（分州人）、および三十八（張鍾馗）参照。〈大正蔵経・(51)107頁、続蔵経・乙8(1)・15丁オ、続浄土宗全書・⑯10～11頁〉

④　平安朝の七往生伝において、悪人往生の例が見えるのは、『日本往生極楽記』成立後、百十余年（康和三年・一一〇一ころ）に編纂された『続本朝往生伝』〈大江匡房撰〉が最初である。（各往生伝の悪人往生説話は、左記の通りである。）なお『続本朝往生伝』の成立は、『大日本国法華経験記』より、約六十年後である。次に、悪人往生説話とみとめられるものを列挙しておく。

(イ)『大日本国法華経験記』（四例。下86・97・112など、悪人説話であっても、兜率天に上生した話は除外した。）

(a)中73浄尊法師(→(ハ)・(g)、(b)下90尋寂法師(→(ハ)・(h)、(c)下94沙弥薬延（→(ハ)・(i)、(d)下102左近中将雅通(→(ハ)・(j)

(ロ)『続本朝往生伝』（二例）

(e)35但馬守源章任、(f)36前伊予守源頼義

(ハ)『拾遺往生伝』（十例）

(g)上28浄尊法師（→(イ)・(a)(h)中7尋寂法師（→(イ)・(b)、(i)中8沙弥薬延（→(イ)・(c)、(j)中15左近中将藤原雅通（→(イ)・(d)、(k)中20散位清原正国（→(ト)・(y)、(l)中23藤井久任、(m)中25鹿菅太、(n)中26下道重武、(o)中34散位従五位下橘守輔、(p)下5大法師順源

(ニ)『後拾遺往生伝』（五例）

(q)上8右衛門尉藤原忠宗、(r)上21前安房守源親元、(s)下6散位源伝(→(ヘ)・(w)、(t)下9錦延行、(u)下27東獄隣僧

(ホ)『三外往生記』（一例）

(v)40甲斐国俗人（丹波大夫）

(ヘ)『本朝新修往生伝』（二例）

(w)16源伝(→(ニ)・(s)、(x)23沙門暹覚

(ト)『高野山往生伝』（一例）

(y)2散位清原正国（→(ハ)・(k)）

⑤　撰者・鎮源自身が〈序〉において「長久の年季秋の月に記せり。」（日本思想大系(7)・44頁）と明記している。

(三)　『今昔物語集』の悪人往生説話

まず、『今昔物語集』に見られる悪人往生説話を巻数の順に列挙する。〔なお（　）内に、出典の『大日本国法華経験記』の略号・**験**、および巻名・説話番号を示した。〕

巻十五・(22)　始雲林院菩提講聖人、往生語（出典未詳）

〃　(27)　北山餌取法師、往生語（出典未詳）

〃　(28)　鎮西餌取法師、往生語（験・中73）

巻十五・㉙　加賀国僧尋寂、往生語（験・下90）
〃　㉚　美濃国僧薬延、往生語（験・下94）
〃　㊸　丹波中将雅通、往生語（験・下102）
〃　㊼　造悪業人、最後唱念仏往生語（出典未詳）
巻十七・(2)　紀用方、仕地蔵菩薩蒙利益語（出典未詳）
巻十九・⑭　讃岐国多度郡五位、聞法即出家語（出典未詳）

〈附記〉

右に挙げた悪人往生説話（九話）は、極楽に往生したとはっきり認定できるものに限った。即ち、悪人説話であっても、（巻十三の㊲の如く）往生を確定できない説話や、（巻十二の㊱、巻十四の⑩、巻十五の㊻・㊼など）兜率天に上生した説話は除外した。

さて、右記の『今昔物語集』の悪人往生説話を概観すると、そこに描かれている悪人は一様でなく、いくつかの型があることが知られる。めぼしいものとして、次の二つのパターンをあげることができる。即ち、㈠殺生・偷盗などの罪業を重ねていた悪人が、後に悔い改めて極楽に往生するという事例と、㈡餌取法師などが、肉食妻帯の破戒行為をなしつつ、一方で善根功徳を積んで往生を遂げるという事例である。以下、この二つの類型を中心にして、説話を例示しつつ検討しよう。

（1）

第一に、日頃、殺生・偷盗などの悪業を重ねていた者がのちに懺悔して極楽往生を遂げるという説話は次の如きものである。

(a)雲林院で菩提講を始めた聖人は、もとは「極タル盗人」で、七度まで入獄し、足を切られようとしたが、相人の取りなしで助けられ、「其ノ後、此ノ盗人、深ク道心ヲ発シテ、忽ニ髻ヲ切テ法師ト成ヌ。日夜ニ弥陀ノ念仏ヲ唱テ、懃ニ極楽ニ生レムト願ヒケル程ニ、……遂ニ命終ル時ニ臨テ、実ニ相叶ヒテ極テ貴クテゾ失ニケル。」（巻十五の㉒）

(b)讃岐国の源大夫は、三宝を信ぜず、殺生を業とする極悪人であったが、狩猟の帰りに、好奇心から里人が集う山寺の講会の場に入りこみ、講師に仏の教について詰問したところ、講師は恐る恐る「此ヨリ西ニ多ノ世界ヲ過テ仏ケ在マス、阿弥陀仏ト申ス。其ノ仏、心広クシテ、年来罪ヲ造リ積タル人ナレドモ思ヒ返シテ一度『阿弥陀仏』ト申シツレバ、必ズ其ノ人ヲ迎テ、楽ク微妙キ国ニ、思ヒト思フ事叶フ身ト生レテ、遂ニハ仏トナム成ル」と教えた。その教えを信じた源大夫は直に髻を切り、「阿弥陀仏ヨヤ、ヨイ〳〵」と弥陀の名を呼びながら西へ西へと直進し、遂に峰の頂きの樹上で往生した。（巻十九の⑭）

(a)(b)両説話の主人公は、仏教の十悪のうち、殺生・偸盗の罪を犯した極悪人であるが、悔い改めて出家し、念仏を唱えて往生を遂げている。ちなみに、両説話とも出典未詳であり、この型の悪人往生説話は、先行の『大日本国法華経験記』には見えない。もっとも『今昔物語集』独自のものというわけではない。即ち、平安朝の諸往生伝に類例が見られる。例えば、(イ)源頼義は、一生殺生をもって業としたが、後に深く罪障を悔いて、多年念仏し、遂に出家し、往生を遂げた（『続本朝往生伝』36）、(ロ)清原正国は、武芸を好み、悪業を重ねたが、俄に出家し、毎日念仏を修して往生した（『拾遺往生伝』中20）、(ハ)鹿菅太は、狩猟を業とした①が、晩年に出家し、念仏して往生した（同上・中25）などである。

つまり、どんな悪人であっても、その悪業を悔い改めれば、往生は可能というわけであるが、(a)の説話の末尾に「年来悪ヲ好ムト云ヘドモ、思ヒ返テ善ニ趣キヌレバ、此ク往生スル也ケリ」（巻十五の㉒）と注記されていることからも、懺悔したとは言うものの、悪業・罪を重ねた悪人が往生できるということは大変な驚きであったと考えられる。

第一節に記したように、大部分の願生者たちは、極楽に往生するために、日頃から種々様々の善根功徳を積み、さらに悪を恐れ、悪業を造らないようにしていた。つまり、罪を造れば、日頃つんだ善根がとり消され往生できなくなるからである。しかるに、僅かではあるが、極悪人でも懺悔するならば往生も可能という事例がみられることは注意すべきである。なお『今昔物語集』の編者は、(b)の説話の末尾に、源大夫の往生に対して「世ノ末ナルトモ、実ノ心ヲ発セバ此ク貴キ事モ有ル也ケリ」（巻十九の⑭）と称讃し、「実ノ心」を強調している。

次に、悪業を重ねていた者が往生を遂げるということでは、前述の(a)(b)と同様であるが、特に臨終の有様が問題になる点で注意すべき説話がある。

(c)殺生・放逸を宗とした極悪人は、「罪ヲ造レル人ハ、必ズ、地獄ニ堕ル也」と人に諭されるが、聞き入れず殺生を重ねた。しかるに、この悪人は重病を受け、「死ナムト為ル時ニ臨テ、目ノ前ニ火ノ車来テ、我レヲ迎ヘムトス。然レバ、『罪造ル者、地獄ニ堕ツ』ト云フ事ハ、実ニコソ」と悔い悲しみ、一人の僧（善知識）の「然レバ、弥陀ノ念仏ヲ唱フレバ、必ズ、極楽ニ往生ス、ト云フ事ヲ信ゼヨ。此レモ、仏ノ説キ教ヘ給ヘル所也」という教えに従って「南無阿弥陀仏ト懺ニ千度唱フルニ、（火の車は失せ）金色シタル大キナル蓮花一葉（が

現れ）」往生を遂げた。（巻十五の㊼）

この説話は、極悪人が臨終に地獄の「火ノ車」の迎えを受けて懺悔し、念仏を唱えて来迎を得たという悪人往生説話であるが、やはり出典未詳であり、中世の『宝物集』に類話②が見られるにすぎない。

ところで、この説話の背景について『今昔物語集』の諸注釈書は全く触れないが、『観無量寿経』下品下生に、五逆十悪の悪人が臨終に、善知識の勧めで念仏を十遍となえ、極楽に往生するとある、その下品下生の記述の影響を受けたものと言えよう。次に真宗聖教全書本（㈠・六五ページ）を私に読み下して引用する。

下品下生とは、或いは衆生有りて、不善業たる五逆・十悪を作り、諸の不善を具す。此の如きの愚人、悪業を以ての故に、まさに悪道に堕し、多劫を経歴して、苦を受くること無窮なるべし。此の如きの愚人、命終の時に臨みて、善知識の、種々に安慰して、為に妙法を説き、教えて念仏せしむるに遇わん。此の人、苦に逼られて、念仏に遑あらず。善友、告げて言わく、「汝、若し念ずるに能わずは、まさに無量寿仏と称すべし。」是の如き、心を至して、声をして絶えざらしめて、十念を具足して、南無阿弥陀仏と称せん。仏の名を称するが故に、念々の中に於て、八十億劫の生死の罪を除く。命終の時に、金蓮華を見るに、猶し日輪の如くにして、その人の前に住せん。一念の頃の如くに、即ち極楽世界に往生を得ん。

言うまでもないが、(c)の説話は下品下生の記述に類似している。即ち、五逆十悪に相当する極悪人が臨終に善知識にあい、称名念仏を勧められ、千度唱えたところ、金蓮華が現れ、極楽に往生したのであり、下品下生の記述が下敷になっていると考えられる。但し、念仏を「千度」唱えたとある所は「十度」とあるべきである。現に『宝物集』では「十回」③となっている。

（2）

先に取りあげた(a)(b)(c)の説話は、いずれも日頃から悪業を積み重ねた悪人が懺悔し、いわゆる善人④となって、往生を遂げた事例である。それに対して、次に問題にする説話は、餌取法師などが肉食妻帯等の破戒行為（非仏教的悪行為）をしつつ、一方で善根を積んで往生を遂げるというものである。それは、巻十五の㉗～㉚の四話であるが、各説話によりその信仰の有様は異なる。

まず、㉗・㉘話〈北山餌取法師、鎮西餌取法師〉は、両話とも外面は肉食妻帯の破戒行為をなす賤しい法師とする（特に、鎮西餌取法師については「頭髪ハ三四寸許ニ生ヒテ綴ヲ着

タリ、怖ロシク穢クテ更ニ可近付クモ非ズ。」と破戒僧の姿を強調する）が、その内面はどうかと言うと、決して悪人とは言えないようである。即ち、北山餌取法師は、後夜に起き、沐浴し庵室にて「仏ノ御前ニ居テ、弥陀ノ念仏ヲ唱テ行也ケリ」とあり、鎮西餌取法師も、丑の刻に起きて沐浴し、持仏堂で「先ヅ法花ノ懺法ヲ行ヒツ。次ニ法華経一部ヲ誦シテ、礼拝シテ後ニハ弥陀ノ念仏ヲ唱フ。其音、貴事並無シ」とある。つまり、両者とも、外面は賤しい餌取で、肉食妻帯の破戒僧（即ち悪人）であるが、その内面は実に尊い修行者（即ち善人）であったのである。両法師の行為は、悪と善の同居という一見矛盾する姿を示すが、その内実は次のようである。北山餌取法師の場合は「可食キ物ノ無ケレバ、餌取ノ取残シタル馬・牛ノ肉ヲ取テ持来テ、其レヲ噉テ命ヲ養テ過ギ侍ル也。」とあるから、その行為は決して悪行ではない。さらに、鎮西餌取法師の場合は「弟子浄尊ハ、愚癡ニシテ悟ル所無シ。人ノ身ヲ受ケ法師ト成レリト云ドモ、戒ヲ破リ慙無シテ、返悪道ニ堕ナムトス。今生ニ栄花ヲ可楽身ニモ非ズ、只、仏ノ道ヲ願テ、戒律ヲ持テ三業ヲ調ヘム事ハ、仏ノ教ヘニハ不叶ズ。分段ノ身ハ、衣食ニ依テ罪造ル、檀越ヲ憑マムト思ヘバ、其恩難報シ。然レバ、諸ノ事、皆、不罪障ズト云フ事無シ。此レニ依テ、浄尊、世間ニ人ノ望ミ離タル食ヲ求テ命ヲ継テ、仏道ヲ願フ。所謂ル、牛・馬ノ肉村也。……」とあり、謙虚に罪深い凡夫の身を自覚・反省し、非僧非俗の形で仏道を求めていく有様が描かれている。その信仰態度は、盲目的に多くの往生業を積み重ねた願生者⑤に較べて、はるかに宗教的と言えよう。

次の㉙話〈僧尋寂〉の場合は、妻帯⑥の破戒僧（肉食の記述は見えない）とするが、前記の餌取法師と同様、その内面は悪人ではない。即ち、尋寂は夜中に起きて沐浴し、浄衣を着て持仏堂に入り、法華経を誦し、念仏を唱えるという修行者である。尋寂は旅の僧摂円に自らを次の如く語る。「弟子尋寂、年来、法花経ヲ読誦シ、弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、仏道ヲ願フト云ヘドモ、世難弃キニ依テ、此ク妻子ヲ具シタリ。然レドモ残ノ命幾ニ非ザルガ故ニ、偏ニ菩提ヲ期ス。……」と。尋寂の場合も凡夫の身を自覚し、非僧非俗の姿で修行したのである。

最後の㉚話〈僧薬延〉は「形、法師也ト云ヘドモ、僧ニ非ズ、頭ノ髪ハ二寸許ニ生ジテ、俗ノ水干袴ヲ着タリ。亦、狩・漁ヲ役トシテ魚鳥ヲ食トセリ。……」という破戒の沙弥であるが、㉗～㉙話同様、薬延は夜中に起きて、沐浴し、浄衣を着て持仏堂に入り、法華経を誦し、念仏を唱えると

いう修行者である。同宿の無動寺の聖人に「弟子薬延、罪業ニ依テ殺生ヲ宗トシテ、慙ノ心無シト云ヘドモ、偏ニ心ヲ至シテ法花経ヲ誦シ、弥陀ノ念仏ヲ唱テ、極楽ニ往生セム事ヲ願フ……」と語っているが、薬延の場合も破戒行為を与儀なくしつつも修行に励んでいる。

以上の四話の信仰内容は若干異なるが、共通する点は、破戒行為（非仏教的悪行為）をなしつつも、法華経読誦、称名念仏などの往生行（善行）を勤め、往生を遂げているということである。たしかに外面は悪人（破戒の沙弥）であるが、内面は尊い修行者で、善人と言えよう。破戒僧たちは悪業と知りつつも、悪業をせざるを得ない凡夫の身を自覚していたのであり、単に見せかけの悪〈偽悪⑦〉とは考えられない。なお、いずれの場合も、夜中に密に修行すると記されているが、そこには隠徳の思想⑧が働いているようである。

（3）

（1）（2）に挙げた悪人往生説話の他に、見落すことができないのは、巻十五の㊸〈丹波中将雅通〉である。雅通は「若カリケル程ニ……心ニ非ズ罪ヲ造ケリ。人ニ伴ナヒテ春ハ山ニ入テ鹿ヲ狩リ、秋ハ野ニ出デ雉（キジ）ヲ殺ス。如此ク罪ヲ造リ、栄花ヲ好ムト云ヘドモ、内ニハ道心有テ、常ニ世ヲ厭フ心有ケレバ、常ニ法花経ヲ誦シ」往生を遂げたが、藤原道雅は「彼ノ雅通ノ中将、生タリシ時、殺生ヲ宗トシテ栄花ヲ好シ人也。何ノ善根ニ依テカ、極楽ニ往生セム。若シ此ノ事実（マコト）ナラバ、極楽(ニ)生レムト思ハム人ハ殺生ヲ宗トシ、栄花ヲ可好キ也」と謗った。ところが、道雅は六波羅密寺の説法を聞きに行き、一人の老尼が「昨夜、夢に貴き僧が『汝ヂ、更ニ歎ク事無クシテ、心ヲ専ニシテ念仏ヲ唱ヘバ、必ズ極楽ニ往生セム事疑ヒ不有ジ。彼ノ左近ノ中将雅通ノ朝臣ハ、善根ヲ不造ズト云ヘドモ、只、心ヲ直（ウルハシ）クシテ法花経ヲ読誦セシ故ニ、既ニ極楽ニ往生スル事ヲ得テキ』とお告げになった」と語るのを聞いて、雅通の往生を信じたという。往生極楽のためには悪業をやめ善根を積まなければならないとされた当時、道雅の疑問は無理のないことかもしれない。しかし、雅通はやむを得ず罪を造ったのであり、内には深い道心があった。そして、善根功徳を重要視するのではなく、「心ヲ直クシテ」往生を遂げたの⑨である。この説話について、『今昔物語集』の編者も称讃するように、他の往生説話とは趣を異にするといえよう。

註

① その他、類例は、『拾遺往生伝』中23（藤井久任）、同・中26（下道重武）、『後拾遺往生伝』上21（源親元）、同・下27（東

獄隣僧）、『本朝新修往生伝』23（暹覚）など、少なくない。

② 『宝物集』（七巻本）・巻七・元禄六年刊本・二丁オ～三丁オ、大日本仏教全書本438頁。同（九冊本）・八・古典文庫本402～403頁。

③ 七巻本（元禄刊本・二丁ウ、大日本仏教全書本438頁）。九冊本では「十たび」（古典文庫本402頁）。なお、両本とも、この説話は『法鼓経』に依るとするが、その経典（つぶさには『大法鼓経』・大正蔵経⑨№270）に該当記事は見られない。

④ 国東文麿氏は、悪人往生説話において、悪人は最終的には善人となって往生している（従って、善人往生話）と指摘されている。「悪人往生話」（『往生伝の研究』所収論文・昭和43年5月・新読書社刊）参照。

⑤ 往生のために法華経を数多く読誦した好延・良算・理満持経者など、法華経の意味内容を考えず、盲目的に読経に励んだ者が多くあった。前記（第一節、註②）拙稿27～28頁参照。

⑥ 妻帯の僧が往生を遂げる例は、巻十五の⑳・㉖などにも見られる。

⑦ 増賀聖人（巻十二の㉜）等、名聞利養を嫌っての偽悪行為。

⑧ 隠徳については、『摩訶止観』に「……まさに徳を縮め瑕（きず）を露（あら）わし、狂を揚げ実を隠し、密（ひそ）かに金唄（こんばい）を覆って盗をして見せしむることなかれ。……」（巻七下・岩波文庫(下)149頁）とある、その教理の影響が考えられる。

⑨ 編者は、この説話の末尾に「極楽ニ往生スル事ハ、善根ヲ造ルニハ不依（ヨラ）ズ、只、心ヲ直（ウルハシ）クシテ経ヲ誦シ念仏ヲ可唱キ也ケリ」と記している。

（四）むすび

『今昔物語集』の悪人往生説話について、大雑把ではあるが、その内容を検討してみた。その結果、問題になる点を簡略にまとめておく。

第一に、悪人往生説話は、極楽往生説話の中でも（一割弱にすぎないが）特異な内容をもつ。つまり、他の多くの説話（善人往生説話というべきもの）においては、願生者たちは日頃から善根を積み、かつ悪を恐れ、悪業を行わないという修行態度であった（即ち、善根を数多く積めば、その功徳で往生は可能となるが、逆に罪を造れば、日頃つんだ善根は取り消され、往生は不可能になると信じられた）。それに対して悪人往生説話においては（第三節に記した如く）、①殺生・偸盗などの罪業を重ねていた悪人の場合も、その悪業を悔い改めれば往生は可能となる。②餌取法師などが肉食妻帯の破戒行為をなしつつも、一方で善根を積めば往生は可能というわけである。極楽に往生するためには、罪を造ってはならないと信じられた当時、十悪五逆の悪人も弥陀の救済にあずかるとか、破戒の生活も往生を妨げないとかいうことは特筆すべきである。殊に、鎮西餌取法師の信仰態度（46頁

参照）や、源雅通の信仰（47頁参照）は、宗教の本質をわきまえたものであり、そこには鎌倉仏教の萌芽が見られよう。

第二に、右に記した通り、悪人往生説話の特異性は認めざるを得ないと思うが、家永三郎氏の悪人往生思想は悪人正機説に直結するという論（「……かゝる悪人往生の思想はもはや一歩を転ずれば悪人正機説と変ずる極限にまで迫つてゐた……」第一節、註⑦論文19頁）は検討の余地があろう。少なくとも『今昔物語集』（或いは、平安末期の往生伝類）に見られる悪人往生の事例は、国東文麿氏も指摘される（第三節、註④論文、参照）ように、いずれも最終的には（悪人ではなく）善人の往生である。従って、『歎異抄』にいう悪人とは意味がちがうことは勿論である。つまり、前記の鎮西餌取法師や源雅通など、その信仰内容は他の修行者に比較して鎌倉仏教的と言い得ても、絶対他力の信仰に到っているなどとは到底いえない。無論、悪人往生思想と悪人正機説との係わりは否定できないが、どのように係わるのか、などの問題については今後の課題としたい。

その他、触れなければならない点も少なくないが、紙数の関係でこの程度にとどめる。

〈附記〉『今昔物語集』の引用文は、日本古典文学大系本に依った。

（本学専任講師　国文学）